

ち、(A1)が最も一般的である。

水田開発はどの部落にも多かれ少なかれ変化を与え、それによって集落機能が大きく変わった部落もある。水田の全く存在しなかった半島先端部の部落で米が作られるようになった。畑作が中心で水田を殆んど持たなかったが、現在では稲作が農業の中心となっている部落もある。農業が、長い間の生業であった漁業に匹敵する程の重要性を帯びてきた部落もある。また、水田開発の行なわれなかった所では、それに代わって開畑に部落の発展の道を求めてきた。

小木半島では、以上のようにして水田が開発され、それを通して、集落機能はこのように変化した。

船橋市における住宅地形成の研究

桜井昌子

(1) 研究の目的

東京近郊にはさまざまな景観を持った住宅地が形成されている。これらの住宅地は、どのような過程を経て、どのような状態に形成されているのであろうか。本論文では、東京近郊の1都市であり、東京の住宅衛星都市としての機能を持つ船橋市に焦点をあて、同市の住宅地がこれまでどのように拡大してきたか、その過程を、そして現在どのような景観を持っているか、その状況を調べ、さらに、どうしてそのように形成されたか、その要因を探ってみたいと思う。

(2) 研究の枠組

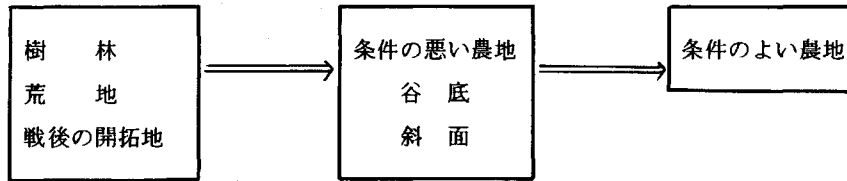
第1章では都市発達の基盤として自然と人文の両面から概観し、第2章では住宅地の発達過程を明らかにするために都市化の過程を明らかにし、船橋市の都市発達段階区分を試みて現在、船橋市がどのような発達段階にあるかを明らかにした。第3章では、住宅地形成に大きな影響を及ぼす鉄道交通を取り上げ、その発達と住宅地形成との関わりを東京東郊において探ってみた。第4章では、船橋市における住宅地域の構造を検討し、その景観や特色を現地調査によって明らかにした。第5章では、前章で調査した船橋市の住宅景観から、交通条件の同様な東武野田線沿線と新京成線沿線の2地域を選び、なぜ住宅景観に差が生じたかその要因を検討考察した。

(3) 研究の結果

住宅地形成の上で鉄道交通の与える影響は大きく、その大枠は鉄道交通によってほぼ決定されているといえる。

しかし、鉄道交通が決定するのはその大枠だけであり、範囲をある程度限定して検討を加えると、そこにさまざまな要因が関わっていることが明らかになる。現在船橋市での2大住宅地域と言えば、総武線・京成線沿線と新京成線沿線である。同市内には、新京成線とほぼ同じ交通条件を持つ東武野田線が通っているが、同条件でありながら新京成線沿線ほどの一大住宅地域は形成されておらず、また住宅景観も新京成線沿線はだぶんに立体化されているのに比べ、こちらは低層住宅中心であり異なったものとなっている。この原因を検討した結果、興味深いと思われるものは農民の影響である。ある範囲に限って住宅地形成を見るならば、その形成には住宅の受け入れ基盤とも言える農民の影響は

確かに大きいものがあるであろう。これら農民の影響を中心にし、調査をもとに住宅地化の進んでいく土地の順を考察してみると



という傾向が見られるように思う。これらは単に農地法による規制以外に、農民の土地への執着心の強弱による。また、これからの宅地化を考えるにあたって問題となるのは、農民の農業経営への積極性であろう。積極的に経営転換をはかって周囲の環境変化に合わせられるかどうかである。なお、これらの考察はまだ多くの検討を加える必要があり、多くの例にあたる必要があると思われる。

船橋市の住宅地域を考えるにあたってさまざまな問題があることに気づく、今回の調査では規模の大きい団地を中心に調査を実施したが、その結果を見ると、孤立状態の団地や、地域全体としての計画性に欠けるために地域の中心施設に欠け、オープンスペースにも欠ける地域が多くなっているが、これも住宅問題を考える上で重要な問題となるであろう。

松代町における農業的土地利用の変化

—千曲川右岸の自然堤防を中心として—

笹 森 久美子

松代町は、自然堤防、後背湿地、山麓緩傾斜地と、バラエティに富んだ自然条件が備わっている。自然堤防においては、かつては割替慣行が行なわれていた。本論では、自然条件と土地利用のかかわりあい、割替慣行が現在の土地利用に及ぼしている影響、更には日本一の長芋の産地となり得た要因、現在生じている問題などを明らかにすることを目的としている。

第一章で松代町の概観を述べ、第二章では農作物の変遷を藩政時代から現在まで、時代を追って述べた。第三章では割替制度がどのような影響を及ぼしているかということと、自然堤防における商品作物栽培の発達・展開を通して、土地利用を考察した。後背湿地、山麓緩傾斜地、豊栄地区、清野地区の土地利用については第四章で述べた。

松代町の農業的土地利用の特徴を明らかにするために、大きく5つに分類した。

1. 自然堤防

洪水の際の保障制度として行なわれていた割替慣行は、堤防建設の結果、洪水の危険がなくなり廃止されたが、その影響は、現在の土地利用にまでも及んでいる。堤外地では、千曲川に対して直角に、短冊状の土地景観がみられる。堤内地においては、一枚の畑の面積が狭く、何ヶ所にも分散している。